

指宿市埋蔵文化財発掘調査報告書第58集

平成27年度市内遺跡確認調査報告書

敷 領 遺 跡
新 番 所 後 遺 跡
迫 田 遺 跡
松 尾 城 跡 IV

平成28年3月

指宿市教育委員会

例 言

1. 本書は、平成27年4月1日から平成28年3月31日まで実施した鹿兒島県指宿市に所在する敷領遺跡等市内遺跡の確認調査報告書である。
2. 発掘調査は、指宿市教育委員会で実施した。調査は恵島瑛子が主に担当した。調査組織は以下のとおりである。

発掘調査主体 指宿市教育委員会
発掘調査責任者 指宿市教育委員会
発掘調査担当組織員 指宿市教育委員会

教 育 長	西 森 廣 幸
教 育 部 長	浜 島 勝 義
社 会 教 育 課 長	満 石 知
社 会 教 育 課 参 事	福ヶ迫 忠
管 理 係 長	海江田 勝 博
社 会 教 育 係 長	内 村 喜代志
文 化 担 当 主 幹	中 摩 浩太郎
文 化 係 長	鎌 田 洋 昭
文 化 係 主 査	西牟田 淳
文 化 係 技 師	恵 島 瑛 子

発掘調査作業員 飯塚勝正、高橋 史、堀口ツユ子、吉元 妙
整理作業員 清 秀子、竹下珠代、鎌田真山美、境 山希
調査協力 松崎大嗣

3. 本書の編集、図面作成、写真撮影は、恵島瑛子・中摩浩太郎・鎌田洋昭が行った。
4. 調査、及び報告書作成に要した経費のうち、50%は国、4.7%は県からの補助を得た。
5. 図中に用いられている座標値は、国土座標系第Ⅱ系に準ずる。
6. 遺物観察表、遺物実測図、遺構図の表記凡例は、『橋本礼川遺跡Ⅲ』（1992、指宿市教育委員会）と『水迫遺跡Ⅰ』（2000、指宿市教育委員会）に準ずる。観察表の特殊な表記については下記のとおりである。
土器の泥和材【カ：角閃石、セ：石英、ウ：雲母、金：金雲母、白：白色粒、黒：黒色粒、赤：赤色粒】
土器部位・法量【口：口縁部、口縁部径、肩：肩部、肩部最大径、胴：胴部、胴部最大径、底：底部、底部径】
調整【内：内面、外：外面、口唇：口唇部、突：突帯部、底：底面、脚内：脚台内面、脚端：脚台接地面】
色調【内：内面、外：外面、肉：器肉】※遺物のマンセル値は、土色計SCR-1を使用し測色した。
7. 発掘調査で得た全ての成果については、指宿市考古博物館時遊館COCCOはしむれて保管し、活用する。

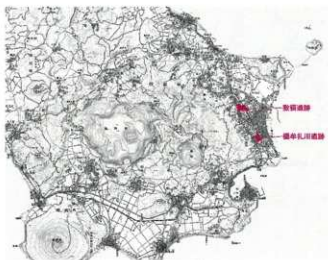
目 次

第Ⅰ編 敷領遺跡	
第1章 遺跡の位置と環境、調査履歴	1
第2章 確認調査に至る経緯と調査概要	1
第1節 確認調査に至る経緯	1
第2節 調査概要	3
第3節 出土遺物	4
第3章 まとめ	6
第Ⅱ編 新番所後遺跡編	12
第1章 遺跡の位置と環境、調査履歴	12
第2章 確認調査に至る経緯と調査概要	12
第1節 確認調査に至る経緯	12
第2節 調査概要	12
第3章 まとめ	13
第Ⅲ編 迫田遺跡	17
第1章 遺跡の位置と環境、調査履歴	17
第2章 確認調査に至る経緯と調査概要	17
第1節 確認調査に至る経緯	17
第2節 調査概要	17
第3節 出土遺跡	18
第3章 まとめ	19
第Ⅳ編 松尾城跡	24
第1章 松尾城跡の踏査	24
第Ⅴ編 その他市内遺跡	27

第I編 敷領遺跡

第1章 遺跡の位置と環境、調査履歴 (第1図・第2図)

敷領遺跡は、指宿市十町小字敷領、及びその周辺に広がる弥生時代から平安時代にかけての複合遺跡である。遺跡は、指宿市街地が広がる火山性扇状地のほぼ中央、海拔4～10m前後の標高にあり、国指定史跡指宿倭寺礼川遺跡の北北西約2kmの地点に位置する。敷領遺跡の立地する扇状地は、北側を流れる二反田川と南側を流れる柳田川の2小河川に挟まれ、海岸に向かって緩やかに傾斜している。



第1図 敷領遺跡位置図

第2図は、敷領遺跡における西暦874年3月25日

に帰属する遺構の調査履歴である。平成7年度以降の開発に伴う調査や、学術調査によって今調査区の南側の「中敷領地区」では西暦874年の開闢岳噴火による埋没建物3基が検出されたことから、一帯に居住域が広がっている可能性が考えられている。その東側には広範囲に水田遺構が検出され、真北方向を向いた大畦の配置も確認されるなど計画的な水田造営が行われている。また、中敷領地区の北側と西側においては、畠遺構が複数箇所で見出されており、一帯が畠地として利用されていたと考えられる。

敷領遺跡においては、6層中位において「部家」の存在を思わせる遺構や遺物が確認されており、同一地点の874年面では大規模な水田造営が行われているため、同時期の集落については特定の場所に集約されていることが予想されることである。

平成26年度の確認調査及びその後の緊急調査において、カマドと石組炉が設置された建物遺構(3号)が確認されたが、確認調査の結果では3号建物以外にも建物の存在が推定されることである。このように、874年においては中敷領地区が集落の中心部分であった可能性が高めると考えられる。また、中敷領地区の1号建物からは黒書土器と転用硯が出上しており、注目すべきと考える。

今回確認調査を実施した地点の西側隣接地において、平成17年度に実施した遺跡確認調査で、古墳時代に帰属する土器集中廃棄所が確認され、南西約80mの地点では古墳時代竪穴住居が1基確認されている。周辺に同時期の集落が営まれた可能性が考えられることである。

【文獻】

お茶の水女子大学大学院人間文化創成科学研究科博物館学研究室・鹿児島大学法文学部比較考古学研究室 2010

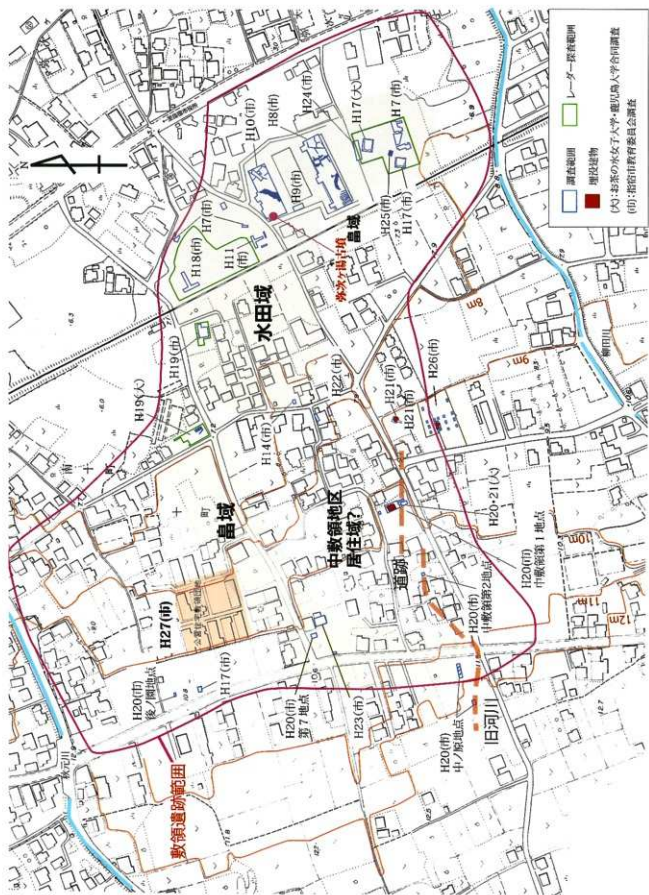
【鹿児島県指宿市 敷領遺跡(中敷領地区)第2次調査】

指宿市教育委員会 2016 『敷領遺跡-松尾城Ⅲ-その他市内遺跡』指宿市埋蔵文化財発掘調査報告書第55巻

第2章 確認調査に至る経緯と調査概要

第1節 確認調査に至る経緯

平成27年度において、指宿市建設部によって公営敷領住宅の建替え計画に伴う埋蔵文化財照会があった。公営敷領住宅は建設から数十年を経過していることから、今後事業化を検討するとのことであった。予定地は周知の埋蔵文化財包蔵地「敷領遺跡」地内に含まれているとともに、前章のように公営敷領住宅の隣接地および、近隣においては古墳時代集落の存在をうかがわせる調査事例があった。このため、敷地内の遺跡の有無を確認するために、事前に試掘調査を実施することとした。



第2図 敷領遺跡土地利用想定図

第2節 調査概要

調査期間、面積、担当者は下記のとおりである。

■調査期間：平成27年9月9日～11日

■面積：11㎡

■担当者：恵島瑛子

公営敬領住宅の地下の状況を確認するために、敷地において5箇所のトレンチ(試掘坑)を設定する計画であったが、建物の間隔が狭く、トレンチ設定は4箇所に留まった。

各トレンチの層位断面図は第4図～第5図に掲載した。以下層序名は橋幸礼川遺跡標準層位に準ずる。表土は現代層であり、層厚は10cm～80cmである。4層中世黒色土層は確認できず、表土下に5層黒コラ火山灰層はおおむね確認できたが、1トレンチのようにブロック状の堆積をみせる箇所もあった。

今調査区近隣の平成20年度調査区では5層直下で高等の遺構が確認されているが、今調査区では遺構は確認されなかった。

6層中の状況であるが、1トレンチでは、奈良・平安時代の遺物が集中して出土する箇所があった。また、トレンチ西半では7層黒コラ火山灰層がほとんど残っておらず、6層と8層の境界が不明瞭であった。

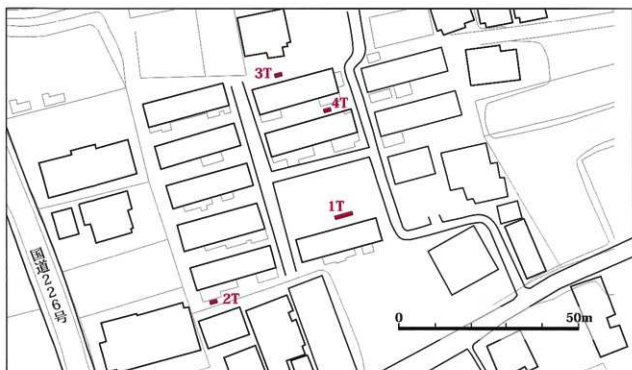
7層黒コラ火山灰層については、3トレンチのみで層をなしていたが、他のトレンチではブロック状に堆積していた。

7層下の状況に関しては、トレンチによって様相が異なっていた。1トレンチでは地表から60cm程度のレベルでブロック状の7層黒コラ火山灰層があり、下位で8層を確認した。8層土は極めて厚く、地表下1.8m程度まで掘削したが、土色に大きな変化はなかったため分層できなかった。8層の上位においては成川式土器が出土した。1トレンチ西側では7層がみられず、6層と8層との境界が不明瞭になっていた。

2トレンチでは12層相当層まで確認できた。この中で、断面に8層中から設けられた柱穴と考えられるビット3基と、土坑とみられる落ち込みを検出した。

3トレンチでは、8層上面が地表下1.2mで確認でき、以下9層、10層と明瞭に分層できたが、遺物等の出土はなかった。

4トレンチでは、8層上面が地表下1.2mで確認でき、9層中から古墳時代の成川式土器が出土している。



第3図 敷地遺跡トレンチ配置図

第3章 まとめ

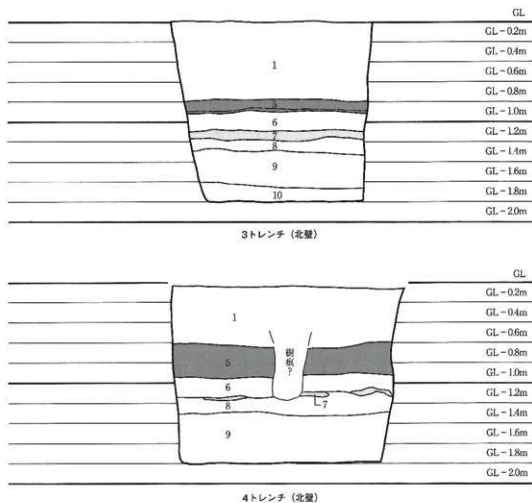
今調査区においては、6層に帰属するとみられる土師器甕が14点出土している。器形からはいずれも別個体と考えられる。胴部の器壁がぶ厚い傾向にあり、外面的特徴は土師器甕の器形であるが、内面はヘラケズリを施すものの十分にケズリ取れず、結果として器壁が厚いままだったと考えられる。

甕の口径は復元できるものでは、1が19.6cm、2が23.6cm、3が21.6cm、4が24.9cm、5が23.1cm、7が25.6cm、12が27.8cmとなる。また、6は口縁部は欠損しているが、形態から最大径は胴部にあるものとみられる。宮田栄二氏による薩摩川内市大島遺跡出土の土師器甕分類(宮田栄二 2005)では、1と6は最大径が胴部にあるため1類か2類になり、その他は口径が22cm以上となり4類に分類される。今調査区の6層中帰属とみられる遺物は土師器甕が主体となる。敷領遺跡の6層には土師器甕の胴部に突帯が付く成川式土器との折衷タイプがみられるが、今回の出土遺物には含まれていない。

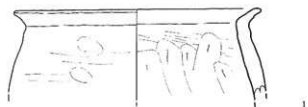
なお、2トレンチではピット3基が検出され、古墳時代の遺構が周辺に所在することが予想された。

【文献】

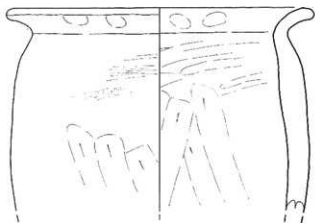
宮田栄二 2005 「博覧 古代の遺構と遺物」[大島遺跡] 鹿児島県立歴史文化財センター発掘調査報告書(80)



第5図 敷領遺跡3・4トレンチ層位断面図(S=1/40)



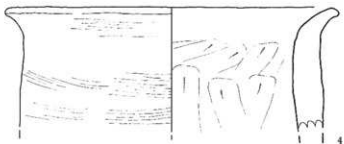
1



2



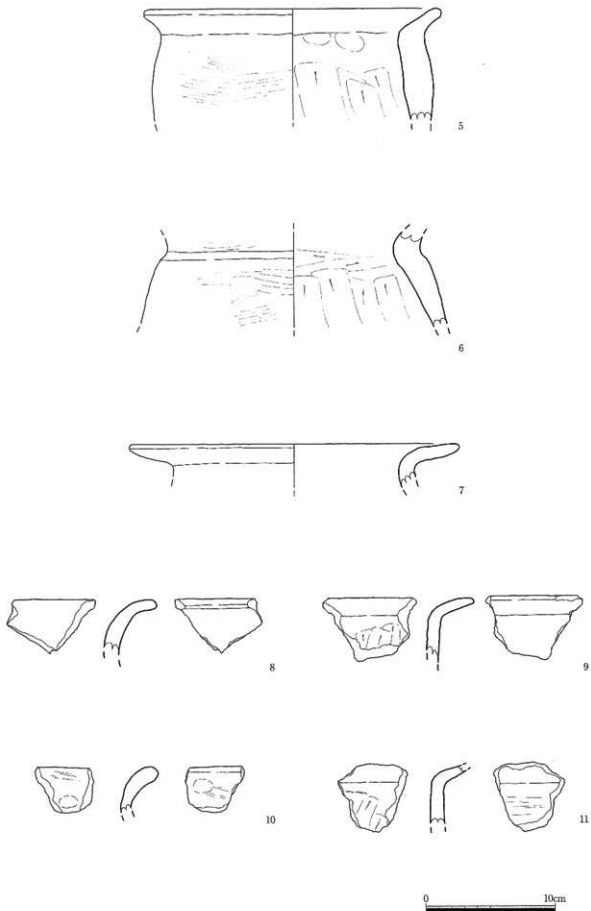
3



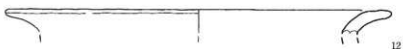
4



第6図 敷領遺跡出土遺物実測図1(S=1/3)



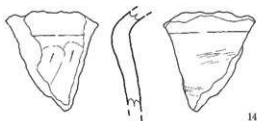
第7圖 敷領遺跡出土遺物実測圖2(S=1/3)



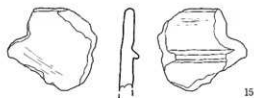
12



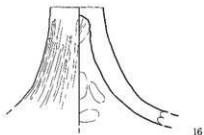
13



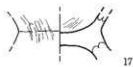
14



15



16



17



第8回 敷頓遺跡出土遺物実測図3(S=1/3)

出土遺物観察表1 (敷領遺跡)

図番	取上げ No.	残存寸量	器種	部位	色外	色内	色内	色他	胎土粒	混和材	調製	その他	出土層
1	—	口径:19.6cm 残存高:7.6cm 頸部径:17.6cm 口頸部長:1.9cm	甕形土器	口縁部	2.5YR6/8	5YR6/2	5YR6/3		砂粒を微量含む 砂粒を若干含む	黒・褐色	内:ナデ・ヘラケズリ 外:ナデ	良好	6層
2	—	口径:23.6cm 残存高:15.6cm 頸部径:19.4cm 口縁部長:3.1cm 胴部最大径: 22.1cm	甕形土器	口縁部 → 胴部	10YR5/8	7.5YR5/6	5YR5/3		小レキを若干含む 砂粒を微量含む	白・ウンモ	内:ヨコナデ・ユビオサエ・ミ ガキ状(遠いタイミングでケ ズリ)・ケズリ・内面使用痕 ナシ 外:ヨコナデ・ユビオサエ・ 刷毛状のナデ・ケズリ状・スス 付層 口唇:ヨコナデ・ユビオサエ	良好	6層
3	—	口径:21.6cm 残存高:8.0cm 頸部径:18.0cm 口頸部長:3.5cm	甕形土器	口縁部	7.5YR6/6	10YR6/4	7.5YR5/2		小レキを若干含む 小レキを微量含む	セ・白・ ウンモ	内:ナデ・ヘラケズリ 外:ヨコナデ・ナデ(部分的に ハケ技)・スス付層 口唇:ヨコナデ	良好	6層
4	—	口径:24.9cm 残存高:9.3cm 頸径:22.1cm 口頸部長:2.7cm	甕形土器	口縁部	2.5YR6/4	10YR6/4	5YR5/3		小レキを若干含む 砂粒を微量含む	白・ウンモ	内:ヨコナデ・ヘラケズリ 外:ヨコナデ・刷毛状 口唇:ヨコナデ	良好	6層
5	—	口径:23.1cm 残存高:8.1cm 頸部径:2.8cm 胴部最大径: 21.9cm	甕形土器	口縁部	5YR6/8	7.5YR6/6	5YR5/2		砂粒を若干含む 小レキを若干含む	白・赤	内:ナデ・ヘラケズリ 外:ナデ・ハケ(横位)	良好	6層
6	—	頸部径:19.7cm 残存高:7.5cm	甕形土器	頸部	7.5YR6/8	10YR5/6	7.5YR5/3		レキを若干含む 小レキを若干含む	白・ウンモ	内:ナデ・ヘラケズリ 外:ナデ	良好	6層
7	—	口径:25.6cm 残存高:3.4cm 頸部径:18.8cm 口頸部長:4.4cm	甕形土器	口縁部	2.5YR5/6	7.5YR6/6	7.5YR5/2		砂粒を若干含む	白・ウンモ	内:ヨコナデ・ナデ 外:ヨコナデ 口唇:ヨコナデ	良好	6層
8	—	残存高:4.3cm	甕形土器	口縁部	10YR6/4	2.5Y6/4	7.5YR5/2		小レキを若干含む 砂粒を微量含む	セ・白・ ウンモ	内:ナデ 外:ナデ 口唇:ナデ	良好	6層
9	—	残存高:5.0cm	甕形土器	口縁部	7.5YR6/8	7.5YR6/6	5YR5/3		砂粒を若干含む 小レキを若干含む	セ・白・ ウンモ	内:ヨコナデ・ケズリ 外:ヨコナデ 口唇:ヨコナデ	良好	6層

出土遺物観察表 2 (敷領遺跡)

図番	取上げ No.	残存法量	器種	部位	色外	色内	色内	色他	胎土粒	混和材	観察	その他	出土層
10	—	残存高:3.6cm	壺形土器	口縁部	10YR6/4	7.5YR6/6	2.5YR5/2		砂粒を若干含む 細砂粒を微量含む	白・ウンモ	内:ナデ 外:ナデ 口唇:ナデ	良好	6層
11	—		壺形土器	胴部	5YR5/6	10YR6/8	5YR5/3		小レキを若干含む 細砂粒を若干含む	白・ウンモ	内:ヨコナデ・ナデ・ハラクスリ 外:ヨコナデ	良好	6層
12	—	口径:27.8cm 残存高:1.7cm	壺形土器	口縁部	5YR5/6	7.5YR6/6	5YR5/2		砂粒を若干含む 細砂粒を若干含む	白・ウンモ	内:ナデ 外:ナデ	良好	8層
13	—	残存高:3.2cm	壺形土器	口縁部	10YR6/8	10YR5/3	7.5YR5/2		小レキを微量含む 小レキを若干含む レキを微量含む 細砂粒を微量含む	セ・白・赤 ウンモ	内:ナデ 外:ナデ 口唇:ナデ	良好	8層
14	—		壺形土器	胴部	10YR6/6	7.5YR5/6	2.5YR5/2		小レキを若干含む 細砂粒を若干含む	白・ウンモ	内:ヨコナデ・ヨコナデのち ハラクスリ 外:ヨコナデ・ナデ	良好	8層
15	—	残存高:6.0cm	壺形土器	口縁部	2.5YR7/2	2.5YR7/2	7.5YR6/1		小レキを若干含む	セ・黒	内:ナデ 外:ヨコナデ・ナデ 口唇:ヨコナデ 突:貼付突帯	やや軟質	8層
16	—	胴部径:3.9cm 残存高:5.5cm	高坏土器	胴台部	2.5YR5/8	5YR6/8	2.5Y5/1 5YR4/1		レキを多く含む 細砂粒を微量含む	白・レキ	国内:ナデ・クスリ? 国外:ミガキ(マメツ)	良好 丹塗り	8層
17	—	底径:6.0cm 残存高:2.9cm	壺形土器	底部	2.5YR7/2	10R5/4	7.5YR5/2 7.5YR4/1		細砂粒を若干含む	黒	内:ミガキ状 外:ミガキ状 国内:ミガキ状	良好	8・9層

第Ⅱ編 新番所後遺跡

第1章 遺跡の位置と環境、調査履歴(第9図・第10図)

新番所後遺跡は、指宿市十二町尻原ノ上一帯に所在する。遺跡は標高50m前後の傾斜地に立地する。これは、西側にある池田カルデラの外崖を成す、標高約280mの山塊から緩やかに下った山裾にあたる。

遺跡は、国指定史跡指宿橋幸礼川遺跡から南約1km、弥生時代から古墳時代にかけての集団墓地が確認された南摺ヶ浜遺跡から南西に約1kmの地点に位置している。

過去の新番所後遺跡での調査は、昭和49年に実施された県立養護学校新設に伴う発掘調査が最初である。

この時の調査で9調査区が設定され、弥生時代から古代にかけての遺物が出土した。発掘調査は開聞岳の火山灰層を基準に実施されており、橋幸礼川遺跡標準層位8層・9層からは成川式土器の辻堂原式段階から笹貫式段階の遺物が出土している。また、1トレンチの4層中世黒色土層最下部で、10世紀代に帰属すると考えられる土師器が出土していることは注目される。

平成3年度の国家公務員宿舎建設に伴う調査では、縄文時代晩期、弥生時代中期、古墳時代の遺物が出土している。

さらに、平成18年度においては、標高32m前後の、海岸線に向かってゆるやかに下る平坦地において大規模小売店建設に伴う発掘調査が実施され、弥生時代中期の遺物が出土するとともに、古墳時代の堅穴住居が1基検出されている。住居は堅穴が不整形であり、支柱穴を取り去った後に土器を埋納していた。

【文献】

- 鹿児島県教育委員会 1977 『新番所後遺跡』 鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書(4)
1992 『新番所後Ⅱ遺跡』 鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書(62)
指宿市教育委員会 2007 『新番所後遺跡』 指宿市埋蔵文化財発掘調査報告書(40)



第9図 新番所後遺跡位置図

第2章 確認調査に至る経緯と調査概要

第1節 確認調査に至る経緯

平成27年度において、独立行政法人国立病院機構によって指宿医療センター病棟の新築計画が浮上したことから、独立行政法人国立病院機構と埋蔵文化財の取り扱いに関する協議を実施した。予定地は周知の埋蔵文化財包蔵地「新番所後遺跡」地内に含まれており、第1章に示したように、昭和49年度の発掘調査地点に近接していることから、遺跡の有無を確認する目的で事前に確認調査を実施することとした。

第2節 調査概要

調査期間、面積、担当者は下記のとおりである。

■調査期間：平成27年6月29日～30日

■面積：30㎡

■担当者：志島瑛子・中摩浩太郎

新病棟建設予定地における埋蔵文化財の有無を確認することを目的として、第10図調査位置図のとおり、幅2m、長さ3mのトレンチを5箇所設定し、確認調査を実施した。

新病棟の基礎に当たる部分に設定した1、2トレンチはGL-2.5mまで、3トレンチは地山が検出されたためGL-1.5

mまで、新病棟周辺の表土すき取り部分に設定した4・5トレンチはGL-80cmまで掘削を行った。

いずれのトレンチにおいても遺物包含層は確認されず、遺構も確認されなかった。各トレンチの詳細については下記のとおりである。以下、層序名は橋牟礼川遺跡標準層位に準じて記す。

1 トレンチではGL-2.5mまで掘削を行った。旧地形(茶褐色粘質土層)は北から南へ向かって下がり傾斜する地形となっている。GL-2.2mでは6層黄コラ(橋牟礼川遺跡標準層位17層:暗青灰色火山灰層・縄文後期)のブロックが確認された。遺構・遺物は検出されなかった。

2 トレンチではGL-2.5mまで掘削を行った。GL-1.3～1.4mで4層暗紫コラ(弥生中～後期)が、GL-1.9m～1.95mでは黄コラが確認された。遺構・遺物は検出されなかった。

3 トレンチではGL-1.5mまで掘削を行った。GL-1.1m～1.2mで6層黄コラ(暗青灰色火山灰層)、GL-1.3mで9層池田湖火山灰層(約5700年前)が確認された。遺構・遺物は検出されなかった。

4 トレンチではGL-0.8mまで掘削を行った。GL-0.6mで6層黄コラが確認された。遺構・遺物は検出されなかった。

5 トレンチではGL-0.8mまで掘削を行った。表土直下、GL-0.1m～0.4mで6層黄コラが確認された。遺構・遺物は検出されなかった。

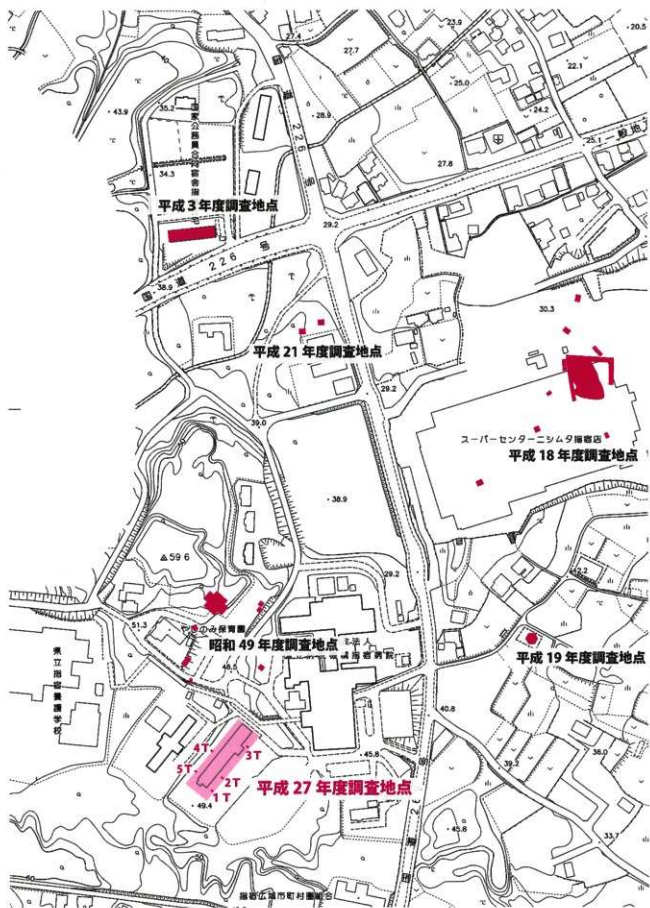
第2章 まとめ

新番所後遺跡では5箇所のトレンチを設置し確認調査を実施した。いずれのトレンチにおいても、遺構・遺物はみられなかった。昭和49年に行われた調査では、弥生時代から古代にかけての遺物が出土しているが、これは今調査区から100m程度北側の地点である。今調査区では表上の造成土等をはさみ橋牟礼川遺跡標準層位17層である黄コラ火山灰層(6層)が確認された。

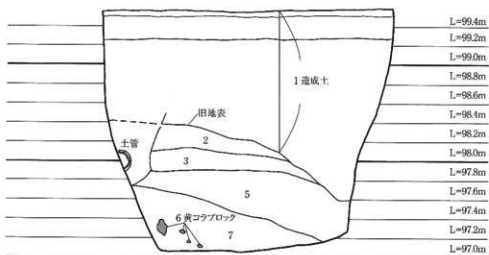
この火山灰層は開聞岳を起源とし、約4,400年前の噴火に伴う降下火山灰層であり(成尾 2016)、大隅半島錦江町川口代・南大隅町根占でも3～8cmの厚さで堆積しているとされる。橋牟礼川遺跡では平成4年度～6年度に実施した博物館建設に伴う発掘調査で確認されているが、ブロック状の堆積であった。しかしながら、今調査区では明瞭な層を成すとともに、最大で20cm程度の層厚で、固結した火山灰層が2層に別れる状況が観察できたことから、指宿市内でも最も良好な堆積状態の例である。

【文献】

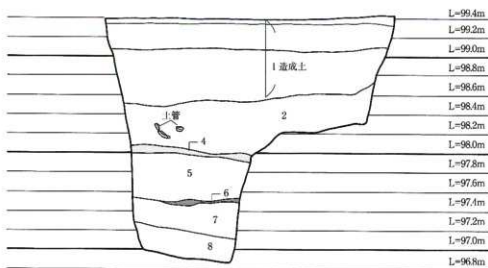
成尾英仁 2016 「橋牟礼川遺跡における開聞岳噴出物について」『橋牟礼川遺跡総括報告書』指宿市教育委員会



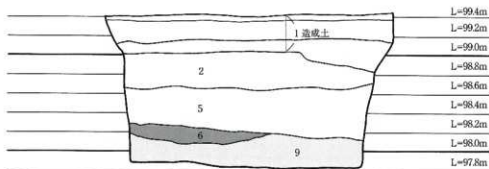
第10図 新巻所後遺跡調査位置図(S=1/3,125)



1トレンチ (東壁)

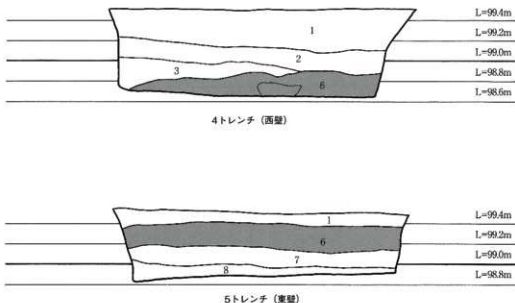


2トレンチ (東壁)



3トレンチ (東壁)

第11図 新番所後遺跡1・2・3トレンチ層位断面図(S=1/40)



第12図 新番所後遺跡4・5トレンチ層位断面図(S=1/40)

〈新番所後遺跡の層序〉

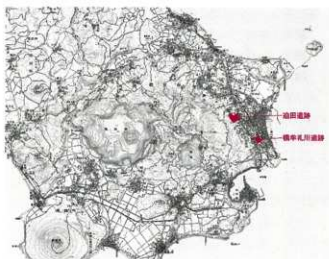
- 1層 造成土
- 2層 造成前の旧表土 土管が埋められている。4層ブロックが上がっていることもある。
- 3層 黄色土層 盛土層とみられる。
- 4層 暗紫コラ火山灰層 弥生時代の開聞岳火山灰層。橋牟礼川遺跡標準層位11層。
- 5層 暗灰色土層 礫が混じる。
- 6層 黄コラ火山灰層 縄文時代後期の開聞岳火山灰層。橋牟礼川遺跡標準層位17層。
- 7層 茶褐色土層 礫が混じる。
- 8層 暗茶褐色土層 カマ土
- 9層 池田湖火山灰層 約5,700年前の池田カルデラ噴火火山灰層。橋牟礼川遺跡では30m程度堆積し、周辺の基盤層となっている。

第Ⅲ編 迫田遺跡

第1章 遺跡の位置と環境、調査履歴

迫田遺跡は、指宿市十二町堂ノ後一帯に所在する。遺跡は山裾に近い緩やかに傾斜する海拔20m前後の火山性扇状地上にあり、国指定史跡指宿橋牟礼川遺跡から北西約2km、数領遺跡中敷領地区から南西に約400mの地点に位置している。

平成9年度に実施された宅地造成事業後の水道管敷設工事において、古墳時代後期の土器集中廃棄所が露出した。土器集中廃棄所は3グループに分かれており、出土遺物は成川式土器の笠貫式段階に帰属する。出土遺物には壺・甕の日用品のほか、軽石製陽石やミニチュア土器等も含まれている。加えて、竪穴住居とみられる遺構断面2基分と、溝状遺構と考えられる遺構断面が確認されている。



第13図 迫田遺跡位置図

【文献】

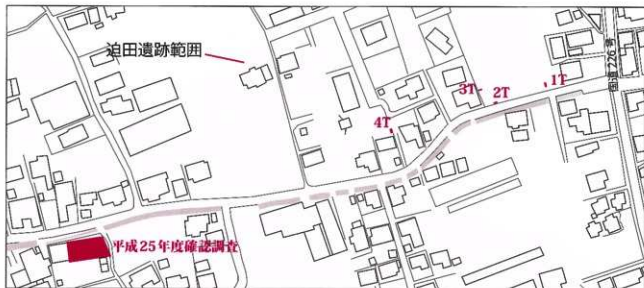
指宿市教育委員会 1998 『橋牟礼川遺跡XⅢ』 指宿市埋蔵文化財発掘調査報告書 第26集

第2章 確認調査に至る経緯と調査概要

第1節 確認調査に至る経緯

平成27年度において、指宿市建設部によって市道柳田迫田線の拡幅工事計画に伴う埋蔵文化財照会があった。予定地は周知の埋蔵文化財包蔵地「迫田遺跡」地内に含まれているとともに、前章のように、迫田遺跡地内では平成9年度に古墳時代の集落の一部とみられる遺構等が確認されている。市道柳田迫田線の拡幅予定地がこれに隣接していることから、遺跡の有無を確認する目的で事前に試掘調査を実施することとした。

第2節 調査概要



第14図 調査地点位置図(S=1/2,500)

調査期間、面積、担当者は下記のとおりである。

■調査期間:平成27年12月16日～18日

■面積:11.7㎡

■担当者:恵島瑛子

追田遺跡の地下の状況を確認するために、市道柳田追田線に隣接して4箇所のトレンチを設定した。各トレンチの概要は下記のとおりである。以下、層序名は橋本礼川遺跡標準層位に準じて記す。

1 トレンチを最も東側の国道226号から10m程度西の箇所に設置した。地表下約60cmまでは現代の耕作土であり、その直下に中世黒色土層(4層)を確認した。中世黒色土層下位に5層紫コラ火山灰層を確認した。層厚は約30cm程度である。この下位の地表下約1.2mの地点で標準層位6層を確認した。6層中からは土器が出土している。6層下位には標準層位7層青コラ火山灰層を挟み、標準層位8層を確認した。8層中からは遺物が出土している。

一方、6層上面において5層紫コラ火山灰層を埋土とした窪みを検出した。埋土である5層紫コラの除去作業を行ったところ、窪みは7層上面にまで達しており、ピットであることを確認した。ピットの底には5層下位の火山礫が堆積していたことから、このピットは874年3月25日において直径約20cm、深さ約20cmで開口していたことになる。その用途は不明である。

2 トレンチを1 トレンチの西約30mに設定した。1 トレンチ同様に、約0.7mの表土をはさみ中世黒色土層を確認し、中世黒色土層下位に5層紫コラ火山灰層を確認した。5層の層厚は約15cmであり、1 トレンチと比較して薄くなっている。この直下の、地表下約0.9mの地点で標準層位6層を確認した。6層中からは土器が出土した。6層下位ではブロック状の7層青コラ火山灰層を挟み、標準層位8層を確認した。8層中からは遺物が出土した。

3 トレンチを2 トレンチの北西約10mに設定した。このトレンチでは中世黒色土層は確認できず、約60cmの表土下は5層紫コラ火山灰層となっていた。5層は約30cm程度堆積していた。5層直下の標準層位6層は20cm程度の層厚があったが、遺物はみられなかった。

4 トレンチを2 トレンチの西約60mに設定した。この地点は、第1章で記した古墳時代の土器集中廃棄所が検出された隣接地である。表土は厚く1.3m程度であった。表土下に砂礫・軽石混じりの2層をはさみ、5層紫コラ火山灰層を確認した。6層上面は表土下約1.6mであり、層中から遺物が出土した。6層下位には標準層位7層青コラ火山灰層、9層(古墳時代遺物包含層)が確認されている。9層中からは遺物が出土した。

第3節 出土遺物

追田遺跡確認調査において出土した遺物のうち、実測可能な16点の遺物を掲載した。1は1 トレンチ、2～16は4 トレンチの出土である。また、1・3は6層(奈良・平安時代遺物包含層)出土、2、4～16は8・9層(古墳時代遺物包含層)出土である

- 1は甕形土器底部である。底部はやや上げ底となる。
- 2は成川式土器甕の口縁部破片である。口縁部は直立し、口縁下に刻みのない断面三角形の貼付突帯を施す。外面はミガキを施す。突帯貼付位置が口唇部に近く、笹貫式段階に帰属するとみられる。
- 3は成川式土器甕の底部である。接地面が平面となる。
- 4は成川式土器甕の口縁部破片である。内湾気味に立ち上がり、口唇部は平らになでられ、外面はミガキが施される。笹貫式段階に帰属する。
- 5は成川式土器甕口縁部破片である。口縁部は直立し、口唇部は平坦に仕上げられるが、部分的にM字状に窪む。
- 6は成川式土器甕口縁部破片である。口縁部は内湾気味に立ち上がる。内外面ともミガキが施される。笹貫式段階に帰属する。
- 7は成川式土器甕口縁部破片である。口縁部は内湾気味に立ち上がり、口唇部は丸く仕上げられる。内外面ともミガキが施される。口唇部に近い位置に貼り付けられる突帯は断面台形になる。笹貫式段階に帰属する。
- 8は成川式土器甕の底部から胴部下半の破片である。底部は上げ底の脚台となり、外面は工具ナデによりミガキ状になる。笹貫式段階に帰属する。
- 9は成川式土器甕口縁部破片である。口縁部は内湾気味に立ち上がり、口唇部はやや平坦に仕上げられる。内外面ともミガキが施される。口縁下に刻みのない断面三角形の貼付突帯を施す。笹貫式段階に帰属する。

10は成川式土器甕口縁部破片である。口縁部はやや内湾気味に直立する。外面はミガキが施される。口縁下に貼り付けられる突帯は断面台形になる。笹貫式段階に帰属する。

11は成川式土器甕口縁部破片である。口縁部は内湾気味に立ち上がり、口唇端部は平坦に仕上げられる。口縁下に刻みのない断面台形の貼付突帯を施す。内外面ともナデ調整が施される。笹貫式段階に帰属する。

12は成川式土器甕口縁部破片である。口縁部は内湾気味に立ち上がり、口唇端部は丸く仕上げられる。内外面ともミガキが施される。笹貫式段階に帰属する。

13は成川式土器甕の幅広突帯である。3条の斜方向沈線をハの字に施し、その間に半截竹管による刺突文を施す。笹貫式段階に帰属する。

14は鉢形土器の底部と考えられる。

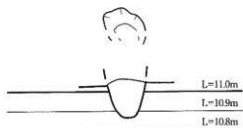
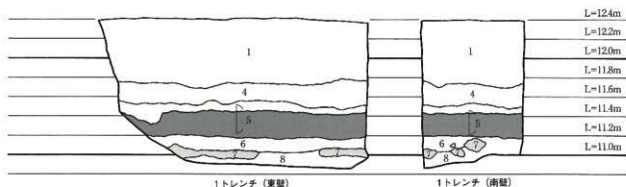
15は鉢形土器の底部と考えられる。

16は台付き椀の底部とみられる。底部はハの字に開く。

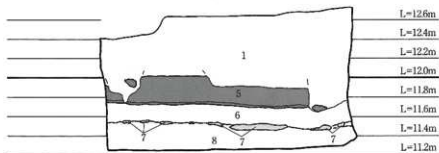
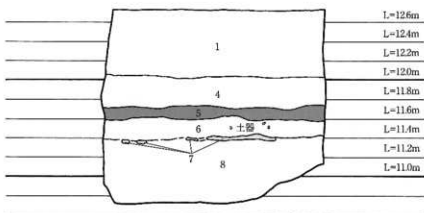
第3章 まとめ

追田遺跡においては、4箇所のトレンチを設けた。いずれのトレンチにおいても、5層紫コラ火山灰層を確認したが、5層直下の遺構は、1トレンチのピット1基のみであった。一方、古墳時代遺物包含層である8・9層では、ほぼ全トレンチにおいて遺物が出土している。出土遺物は基本的に成川式土器の笹貫式段階に帰属する土器が中心となっている。4トレンチの北側において、平成9年度に検出された、集落を構成するとみられる土器集中廃棄所や堅穴住居、溝状遺構等との関連を考慮する必要があると考える。

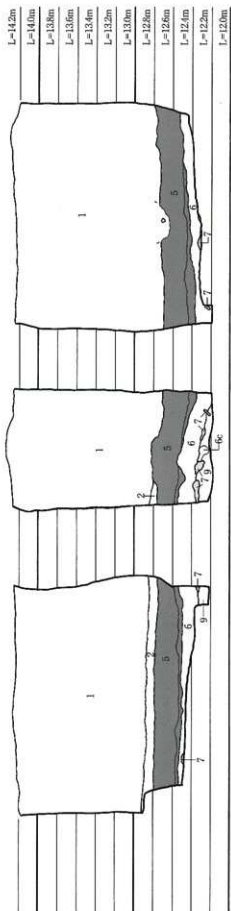
一方で、平成25年度において今調査区の西側約300mの地点で縄文晩期の遺物包含層が確認されるなど、長期間に渡って生活が営まれていたことをうかがわせる遺物の出土がある。今後の調査において、遺跡の変遷の解明等が課題となっている。



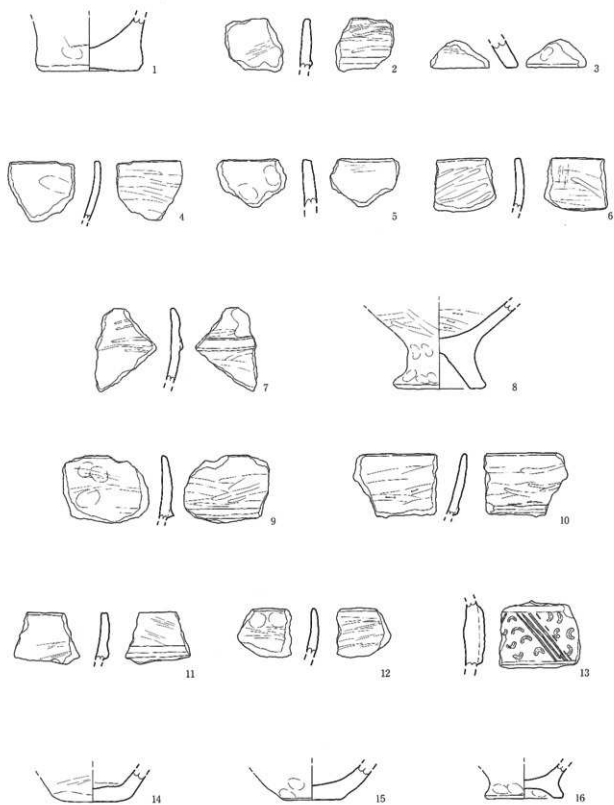
1トレンチピット (S=1/20)



第15図 迫田遺跡1・2・3トレンチ層位断面図 (S=1/40)



第16図 迫田遺跡4トレンチ層位断面図(S=1/40)



第17図 迫田遺跡出土遺物実測図(S=1/3)

出土遺物観察表3(迫田遺跡)

図章 No.	取上げ No.	残存法量	器種	部位	色外	色内	色内	色色	胎土粒	混和材	調整	その他	出土層
1	1	底径:8.4cm 残存高:4.2cm	甕形土器	底部	5YR8/3	5YR8/3	7.5YR5/2	底 10YR5/1	砂粒を若干含む 小レキを若干含む	黒	内:不明 外:ナデ 底:少し上げ底	良好	8層
2	一括	残存高:4.0cm	甕形土器	口縁部	7.5YR7/3	10YR8/1	7.5YR5/2		砂粒を若干含む	黒	内:ナデ 外:ミガキ 口唇:ミガキ 突:断面三角形・貼付突帯	良好	6層
3	一括		甕形土器	底部	10YR8/1	5Y8/1	10YR6/2		砂粒を若干含む	黒	内:ナデ 外:ナデ	良好	6層
4	12	残存高:4.7cm	甕形土器	口縁部	2.5YR6/6	10YR6/6	10YR5/3		砂粒を若干含む	黒	内:ナデ 外:ミガキ 口唇:ナデ	良好	青い 土下9 層
5	15	残存高:3.7cm	甕形土器	口縁部	10YR7/4	10YR7/4	10YR6/2		砂粒を若干含む	黒	内:ナデ 外:ナデ 口唇:ナデ・部分的にM字	良好	9層上 部
6	16	残存高:5.2cm	甕形土器	口縁部	2.5YR5/4	2.5YR6/4	5YR5/2		砂粒を微量含む	黒	内:ミガキ 外:ミガキ 口唇:平紐	良好	9層
7	13	残存高:6.4cm	甕形土器	口縁部	10YR6/4	10YR6/3	5YR5/2		砂粒を若干含む	黒	内:ミガキ 外:ミガキ 口唇:ミガキ 突:断面台型・貼付突帯	良好	青い 土下9 層
8	21	底径:5.4cm 脚台形:7.3cm 脚台高:3.2cm	甕形土器	底部	5YR8/1	5YR8/2	7.5YR6/1	底 10YR4/1	砂粒を含む	黒	内:工具によるナデ 外:工具によるナデ・少しミ ガキ状・ユビオサ工 器内:ナデ	良好	9層
9	一括	残存高:5.1cm	甕形土器	口縁部	5YR6/2	7.5YR7/2	7.5YR6/2		砂粒を若干含む	黒	内:工具によるナデ 外:ミガキ・スス付帯 口唇:ミガキ 突帯:断面三角突帯	良好	9層
10	一括	残存高:4.8cm	甕形土器	口縁部	10YR8/1	10YR8/1	10YR6/1		砂粒を若干含む	黒	内:工具によるナデ 外:ミガキ 突:断面台型・貼付突帯	良好	9層
11	一括		甕形土器	口縁部	5YR8/2	7.5YR8/3	5YR5/2 10YR6/1		砂粒を若干含む	黒	内:ナデ 外:ナデ 口唇:ナデ 突:断面台形	良好	6層
12	一括		甕形土器	口縁部	5YR6/3	10YR8/1	7.5YR6/2 5YR5/2		砂粒を若干含む	黒	内:ミガキ 外:スス付帯 口唇:ミガキ	良好	9層
13	一括		甕形土器	突帯部	7.5YR7/2	7.5YR7/6	2.5YR6/3 2.5Y5/1		砂粒を若干含む	黒	内:マメツ 外:幅広突帯	良好	9層
14	一括		鉢形土 器?	底部	5YR6/4	7.5YR5/1	7.5YR5/2	底 5YR6/3	砂粒を若干含む	黒	内:ナデ 外:ナデ・ミガキ状	良好	9層
15	一括	底径:4.5cm	鉢形土 器?	底部	2.5YR6/6	2.5YR6/6	5YR5/2	底	砂粒を若干含む 砂粒を微量含む	白・黒	内:ナデ 外:ナデ	良好	9層
16	一括	底径:5.4cm 残存高:3.2cm 底台径:6.2cm 底台高:1.3cm	鉢 (古付き)	底部	10YR4/1	10YR4/1 (表裏均 質?)	7.5YR5/2	底 7.5YR5/2	砂粒を微量含む	黒	内:ナデ 外:ナデ・指図瓦風 胴内:ナデ・指図瓦底	良好	9層

第Ⅳ編 松尾城跡

第1章 松尾城跡の踏査

平成28年度に実施した松尾城跡の踏査は下記のとおりである。

- ・実施日：平成28年1月31日(土)～2月1日(月)
- ・指導者：三木清氏(鹿児島国際大学短期大学部名誉教授)
- ・対象地：曲輪1(市指定文化財周辺)
- ・測量社：機埤蔵文化財サポートシステム

・踏査目的：昨年度に踏査を行った本丸推定地の曲輪2の東南側から松尾崎神社がある曲輪1を踏査し、縄張り図を作成する基礎となる地形図を作製した。

・結果：曲輪1の頂上部には松尾崎神社があり、氏子への聞き取り調査によって、本殿部分は高い段を削平して造られていることが確認された。また、本殿東側には土塁と考えられる高まりがあり、その東南側の断面の存在から神社建設時において、平坦面を造成する目的で削平を受けたと考えられる。

曲輪1の東南側において帯曲輪と認識できる範囲を確認した。帯曲輪は、神社のある面との比高差が約14mで、南西側から東南側を囲むU字形である。また、海側の北東方向に延びるにつれ段を有しやや上がっている。さらに、曲輪1の南西側には馬蹄形を呈する土塁があり、その内側は播鉢状になっている。土塁上面と内側の底面との高低差は約7.6mあり、堅固な造りを思わせる。この範囲は、シラスを意図的に削り出し、または自然地形を一部活用しながら造り出されたものと推測できる。



第17図 松尾城縄張り図(S=1/1000)



写真1 曲輪1踏査地点写真



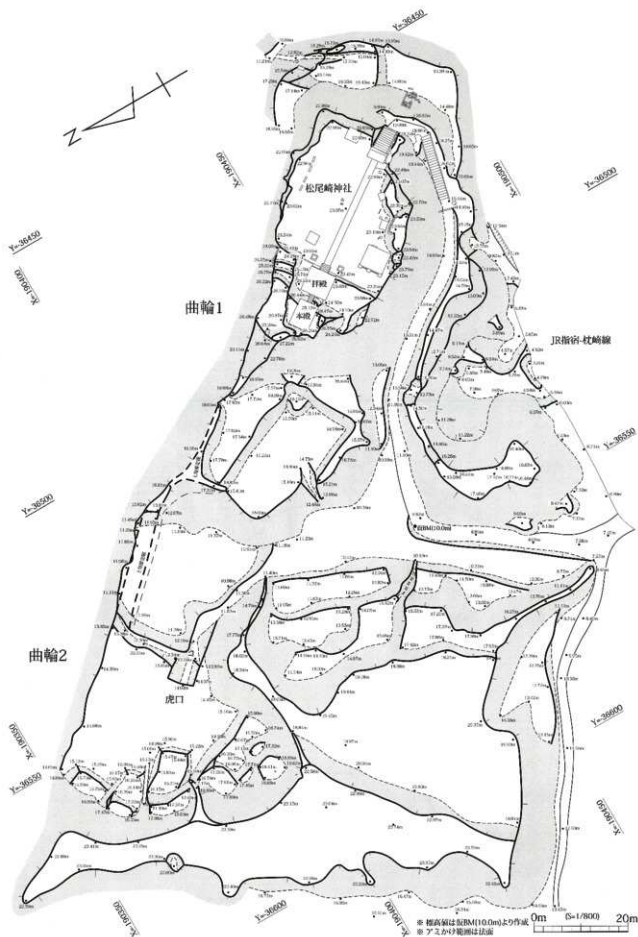
写真2 曲輪1頂上部・松尾崎神社境内写真



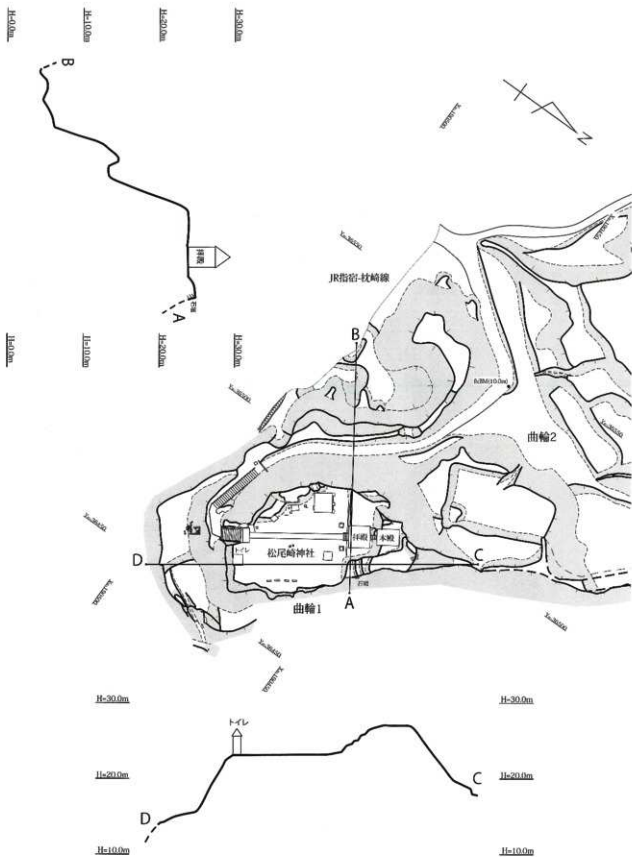
写真3 曲輪1東南側の帯曲輪地点写真



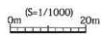
写真4 曲輪1馬蹄形土塁地点写真



第18図 松尾城跡 曲輪1測量図(S=1/800)



※ 断面図横100%縦200%
 標高値は仮BM(10.0m)より作成
 ※ アミかけ範囲は法面

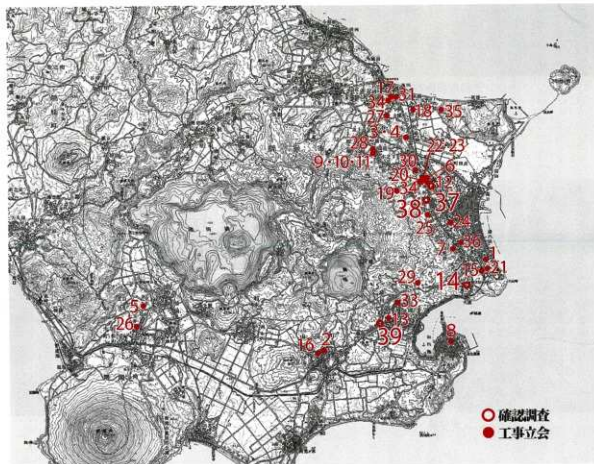


第19図 松尾城跡 曲輪1測量図(S=1/1,000)

第V編 その他市内遺跡

市内にはおよそ120か所の周知の遺跡地がある。平成28年1月末現在で37件の93条届出がなされ、2件について確認調査を、35件について工事立会いを実施した。また、2件の公共事業の計画があったため、確認調査を実施した。

なお、成川遺跡の確認調査(表4の39)は、本書への図面等の掲載が間に合わなかったが、概要を述べる。調査地点は、昭和155-56年の成川バイパス工事に伴う発掘調査で、弥生時代堅穴住居8基が検出された調査区の東約80mの地点である。遺構は検出されなかったが、斜面に紫コラ火山灰層及びローリングを受けた縄文土器・弥生土器・成川式土器を含む二次堆積層が厚く堆積していた(P30に写真掲載)。



第20回 平成27年度確認調査・工事立会い地点

遺跡名	所在地	種別	公共	対応	遺跡名	所在地	種別	公共	対応
1 南郷ヶ浜	道の浜6丁目	住宅		工事立会	21 牟礼跡	十二町字六反平原	住宅		工事立会
2 巻田池	山川小川	住宅		工事立会	22 玉利	東方	住宅		工事立会
3 田口田	西方	住宅		工事立会	23 玉利	東方	住宅		工事立会
4 田口田	西方	住宅		工事立会	24 南田原	十二町字中川跡後	住宅		工事立会
5 玉井	開闢十町	住宅		工事立会	25 南田原	十二町字平山ノ下	住宅		工事立会
6 玉利	十町(土地区画整理地)	住宅		工事立会	26 堀込殿跡	開闢十町字堀之内	住宅		工事立会
7 片野田	十二町字諏訪	住宅		工事立会	27 大園原	西方字寶神久保西	住宅		工事立会
8 観音外	山川渡見町	住宅		工事立会	28 大園原	西方字大園原	住宅		工事立会
9 中島ノ下	東方	住宅		工事立会	29 内山	十二町字前首尾	地下資源調査		工事立会
10 中島ノ下	東方	住宅		工事立会	30 玉利	東方	住宅		工事立会
11 中島ノ下	東方	住宅		工事立会	31 大園原	西方字濱平	住宅		工事立会
12 玉利・敷畑	十町	店舗		工事立会	32 中島ノ下	東方字中野	住宅		工事立会
13 成川	山川成川	住宅		工事立会	33 下津・神方	山川成川	住宅		工事立会
14 新倉所後	十二町区画ノ上	病院	△	確認調査	34 玉利	東方字小村	住宅		工事立会
15 南郷ヶ浜	十二町字横尾ノ後	住宅		工事立会	35 下家越	西方字横ノ原	住宅		工事立会
16 巻田池	山川小川	電柱		工事立会	36 橋本孔川	十二町	住宅		工事立会
17 大園原	西方字大園原	住宅		工事立会	37 敷畑	十町	田地	○	確認調査
18 上吹越	西方	住宅		工事立会	38 泊田	十町字幸ノ後	田地	○	確認調査
19 上玉利Ⅱ	東方字瀬原村下	住宅		工事立会	39 成川	山川成川	住宅	○	確認調査
20 玉利	東方	住宅		工事立会					

※太字は確認調査実施、斜体字は周知の包蔵地隣接地を示す。

表4 平成27年度 確認調査・工事立会い対応一覧



1 トレンチ層位断面状況



1 トレンチ遺物出土状況



2 トレンチ全景



2 トレンチピット検出状況



3 トレンチ層位断面状況



4 トレンチ層位断面状況

敷領遺跡各トレンチ写真



敷領遺跡出土遺物写真



新番所後遺跡1 トレンチ全景



新番所後遺跡2 トレンチ全景



新番所後遺跡3 トレンチ層位断面状況



新番所後遺跡4 トレンチ層位断面状況



新番所後遺跡5 トレンチ全景



成川遺跡層位断面状況→
(右上:南・西面層位断面、右下:西面層位断面)



新番所後遺跡各トレンチ写真・成川遺跡確認調査写真



1 トレンチ全景



1 トレンチピット検出状況



2 トレンチ全景



3 トレンチ層位断面状況



4 トレンチ全景



4 トレンチ遺物出土状況

追田遺跡各トレンチ写真



迫田遺跡出土遺物写真

報告書抄録

ふりがな	
書名	平成27年度市内遺跡確認調査報告書（数領遺跡・新香所後遺跡・追田遺跡・松尾城跡IV）
副書名	—
巻次	—
シリーズ名	指宿市歴史文化財発掘調査報告書
シリーズ番号	第58集
編著者名	恵島 瑛子・中東 浩太郎・鎌田 洋朗
編集機関	鹿児島県指宿市教育委員会（指宿市考古博物館 時差館COCCOはしむた）
所在地	〒891-0403 鹿児島県指宿市十二町2290 TEL：0993-23-5100
発行年月日	平成28年3月31日

所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
数領遺跡	指宿市十二町		6.54 (2.58)	31°14'50"	130°38'	2015.9.9～ 9.11	11㎡	公共事業
新香所後遺跡	指宿市十二町		6.28 (4.38)	31°14'37"	130°37'57"	2015.6.29～ 6.30	30㎡	民間開発
追田遺跡	指宿市		6.37 (5.47)	31°13'13"	130°38'42"	2015.12.16 ～12.18	11.7㎡	公共事業
松尾城跡	指宿市西万字 城ヶ崎		6.25	31°16'54"	130°37'54"	2015.1.31 ～21		市内確認調査（国家・ 県費補助事業）

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
数領遺跡	集落・火山災害遺跡	古墳、 奈良～平安時代	ピット・土坑	土師器、成川式土器	87年の発掘調査で確認した成川式土器を参考文献『数領遺跡』1997「数領遺跡Ⅱ Ⅱ次～Ⅲ次古墳」1999
新香所後遺跡	集落	弥生、古墳、古代	—	—	食コラ火山灰 参考文献『新香所後遺跡』2007
追田遺跡	集落	古墳時代	ピット	成川式土器	参考文献『柳平乳川遺跡文庫』1998
松尾城跡	山城	中世	土輪、空堀、 帯曲輪、土塁	—	一部は市指定文化財

平成27年度市内遺跡確認調査報告書正誤表

頁・行	誤	正
29・表4	39 成川 山川成川 住 宅 ○ 確認調査	39 成川 山川成川 住 宅 確認調査
	32 (遺物番号)8	(遺物番号)9
	32 (遺物番号)9	(遺物番号)8

平成27年度市内遺跡発掘調査報告書

敷額遺跡・新番所後遺跡・迫田遺跡・松尾城跡Ⅳ

平成28年3月

発行

指宿市教育委員会

鹿児島県指宿市十二町2290

印刷所

尚土印刷株式会社

鹿児島市南榮3-1-6
